

中古

昨年は古今集一〇〇年・新古今集八

〇〇年の記念の年、特に十月から十二月にかけて、多くの美術館で記念の展覧会が催された。国立歴史民俗博物館と国文学研究資料館の連繫によって、それぞれの会場で開かれた「うたのちから―和歌の時代史―」展と「うたのちから―古今集・新古今集の世界―」展。三の丸尚蔵館の「やまとうた―美のこころ―」展。五島美術館の「やまとうた―美のこころ―」展。五島美術館の「平安の仮名、鎌倉の仮名」展。京都国立博物館の特集陳列「和歌と美術」。大阪青山歴史文学博物館の「勅撰和歌集の世界」展など、力のこもった展覧が目白押しで、すべてを見るためにスケジュール調整に苦労した人も多かった。それぞれに見どころが多かった中で、特に五島美術館の「やまとうた―美のこころ―」展は、広く集められた展示品の質の高さと優れた企画力に、とりわけ見る者の心を打つものがあつた。名児耶明氏をはじめとする担当者のご努力に敬意を表

したい。

書物の展示は、開かれた部分しか見ることができないという宿命を常に伴うが、それでもなお、価値の高い書物の実物を目にするという体験は、複製や写真では味わうことのできない確かな手応えを感じさせてくれる。たとえばガラス越しのささやかな対面であっても、それは時に「出会い」にも似た力で人の心を捉える。書物が「情報」としてでなく、さまざまな要素を合わせ持った「もの」として存在することを、その時我々は感得する。昨秋の充実した展覧会の集中開催は、まことに記念の年にふさわしく、多くの人に原典を見ることが意味と喜びを再認識させてくれたはずである。さきに紹介した展覧会の多くは、和歌文学会の呼びかけにより、その後援や協力のもとで開催された。国文学の学会がこれだけ多くのイベントにかかわったことも、過去になかったのではないか。担当委員浅田徹氏のご苦勞に対し、あらためて感謝

申し上げる。

記念の年にあわせて、岩波書店から『和歌をひらく』全五巻（浅田徹・勝原晴希・鈴木健一・花部英雄・渡部泰明編集）が刊行されつつある。第一巻「和歌の力」（10月）に続いて第二巻「和歌が書かれるとき」（12月）が出たが、「述懐」を問題にした小川豊生「和歌と帝王」（第一巻）など興味深い論考が多く収められている中で、特に第二巻に、平安時代の伝本として貴重な国宝「元永本古今和歌集」をテーマに書・本文・表記の三つの視点から迫った、萱のり子「元永本の美学」、徳原茂実「浮動するテクスト」、遠藤邦基「表記の戯れ」の三論考が並べられているのが注目される。元永本は、五島美術館の「やまとうた―美のこころ―」展に展示され、本年一月からは東京国立博物館の「書の至宝」展にも出品された。その本を断片的な「情報」としてでなく「もの」として総合的に捉えようとする今回の企画が新しい伝本研究の起爆剤となることを望みたいが、さらに、より時代を遡って、この種の研究がいずれ、古今集成立前後の、いわば草創期の平安和歌の実態にまで及ぶことを、原典資料が現存しないことを承知のうえで、今後の課題として強く願っておきたい。

万葉集が文字に書かれたのとは別な意味で、平安和歌は仮名文字表記と一体になって成立し展開したと考えられるからである。

『竹取物語』に見える「月の顔見るは忌むこと」という言葉は有名だが、なぜ月を見ることが忌まれなければならないのかという点に関しては、まだはっきりした定説を見ていないというのが実情であろう。静永健「月を仰ぎ見る妻——白居易下邦贈内詩考」(『九州中国学会報』43 5月)は、その禁忌の原拠とも見なされている白居易の「贈内」等の詩について、それら一連の作が三歳で夭逝した長女に対する愛惜の念を背後に持つて妻に贈られているとする。その説自体も興味深い、論の冒頭に「私たちは中国学の専門家として、少なくともそれ(忌月の言い伝え)が『中国思想』および『中国伝来の思想』とは言えないことを知っている」と述べられていることは重要である。「専家」でないのをよいことに、国文学界の中で不確かな見解が何となく通用してきたとすれば、それは大きな問題であり、十分な反省を必要とする。ただし、静永説が正しいとしても、平安時代の日本人は、そのような白居易一家の事情を知らずに「贈内」等の詩

を読んでいた可能性が大きい。在原業平の「おほかたは月をもめてじ」(古今集879)の一首も、そのような受容から生まれた産物であろう。

富原カンナ「方丈」考(『和漢比較文学』35 8月)は、維摩の居室の意でありながら『維摩経』本文に見えない「方丈」の語の出典を探りつつ、山上憶良から鴨長明「方丈記」に至るその影響を詳細に検討した力作。『維摩経』の影響は多方面に及ぶ。本論は今後、その「方丈」の語を考察する際の必須の文献となろう。

伊藤禎子「俊蔭一族の物語と楼」(『中古文学』76 10月)は、「宇津保物語」の最終巻「楼の上」について、秘琴伝授の場となる「楼」に注目して考察する。「楼」という建築様式を歴史的にたどり、どこからでも外部が見えるという公開の側面とどこからも内部が見えないという非公開の側面の併存に注目するなど、従来指摘されなかった面からの分析が新鮮。今後の展開に期待したい。

佐藤道生「平安後期の題詠と句題詩——その構成方法に関する比較考察——」(『和歌文学研究』91 12月)は、『新古今集』成立以前の複合題の題詠について、その方法が句題詩の詠法から多くを

学んでいることを多数の実例の分析を通して説き明かし、さらにその背後に「詩の国風化」、言い換えれば日本漢詩の和歌への同化という現象があったことを指摘する。日本の文学史をトータルな形で理解するために避けて通れない闇のひとつが、いま明らかにされようとしている。

最後に、記念の年のイベントをもうひとつ。八月八日に、岐阜県郡上市大和で、郡上市と和歌文学会共催のシンポジウム「古今集——注釈から伝授へ——」が催された。片桐洋一の基調講演の後、島津忠夫の司会のもと、鈴木元・川平ひとし・海野圭介によるパネルディスカッションがおこなわれ、満員の会場は大いに盛り上がった。当地は、宗祇が東常縁から古今集の伝授を受けたゆかりの地。いま、その居城あとに展示館やレストランを備えた「古今伝授の里」が作られ、郷土文化による町おこしの成功例として見学者が絶えない。かつて各地に根付いていた古典文化の再評価と再生は、地域の活性化だけでなく、今後の古典文学研究の空洞化を防ぐためにも必須の課題であろう。

— 関西大学教授 —